

グラスゴーと日本の物品交換とその背景について

—1860年から70年代のグラスゴーと日本の交流を中心に—

小野 文子 芸術教育講座

キーワード：グラスゴー、東京国立博物館、物品交換、ジャポニスム

はじめに

日本の開国を機に大量の浮世絵版画や工芸品が海外に流出し、欧米の人々に新鮮な驚きをもって迎えられ、1860年ごろからおよそ半世紀にわたって、西洋の美術に大きな影響を与えた。このジャポニスム（日本趣味）という文化現象の流行と日本の近代化を背景に、1878-9年にグラスゴー市の博物館と博物館（現在の東京国立博物館。1878年当時の呼称は「博物館」であるが、本稿ではグラスゴーの博物館との混乱を避けるため、「東京国立博物館」を使用する）の間で物品交換が行われた¹。1878年当時のグラスゴー市の博物館レポート、*Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow*には、グラスゴー市が日本から贈答品を受け取り、その見返りとして、グラスゴーやスコットランド西部の生産物を日本に送ることが求められていると書かれている²。1991年には1878年の日本からの贈答品を中心とした *Art for Industry. The Glasgow Japan Exchange of 1878* という美術展がグラスゴーのケルヴィングローヴ博物館で開催された。その美術展カタログの中でも、この1878年のオリジナルの博物館のレポートをもとに書かれているため、日本政府が返礼を期待して贈答品を送ったかのように表現されている。そして、拙論「グラスゴーにおけるジャポニスム」『ジャポニスム学会会報誌』（第23号、2003年）においても、これらの資料をもとに、ジャポニスムという現象に目をつけた日本政府が、スコットランドで生産された工業用品のサンプルと、日本の品物（陶磁器、漆器、和紙など）の物々交換を行うことをグラスゴー市に申し入れたと書いた。しかしながら、東京国立博物館の資料館に残されている手紙等の資料から、贈答品を受け取ることを望んで物品交換を申し込んだのは、グラスゴー市のほうであるという新事実が明らかとなった。スコットランド、特にグラスゴーにおけるジャポニスムについて考察する場合、1878年以降にその気運が高まったことから、本稿では、新出資料をもとに、この物品交換の経緯を明らかにするとともに、その意義について考察したい。

1. 物品交換

1878年11月、1150もの日本の品物がグラスゴーに到着した。同年12月9日の『グラスゴー・ヘラルド』に報道されたように、このようにまとまった数の日本の品物がイギリスの美術館に贈られるのは、異例のことであった。

前述のように、1878年のグラスゴー市の博物館レポート、*Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow*には、日本の生産品（産物）や工業製品を受け取り、その見返りとして、グラスゴーやスコットランド西部の生産物を送ることが求められていると書かれているために³、1991年にケルヴィングローヴ博物館で開催された、1878年の日本からの贈答品を展示の中心とした美術展カタログや、『ジャポニスム学会会報誌』に掲載した拙論において、物々交換を行うことをグラスゴー市に申し入れたのは日本政府であると書いた。しかしながら、東京国立博物館の資料館に保存されている書簡等の資料から、贈答品を受け取ることを望んで物品交換を申し込んだのは、グ

ラスゴー市の側であることが明らかとなった。

すでに述べたように、開国後流出した浮世絵などの日本の品々は、西洋の芸術家を魅了し、欧米ではジャポニスムという現象が広がっていた。これに目をつけたグラスゴーの博物館の学芸員、ジェームズ・ペートンは、東京帝国大学の工学教授であったロバート H. スミスを紹介して日本に物品の交換を申し入れた。書簡の日付から、この物品交換が 1876 年の終わりごろから準備されたことが分かる⁴。グラスゴー市の博物館のレポートによると、ハリー・パークス卿も助力して、この物品交換が実現した。初めに日本政府が日本の品物を贈り、その後グラスゴー側がスコットランド西部の化学工業製品や布（ウールやリネン）のサンプル、そしてコーポレーション・ギャラリーの収蔵品の中から油絵数点を、東京国立博物館に送った⁵。日本から届いた品物の一部は、グラスゴー市の中心部に位置するコーポレーション・ギャラリーズの上階に展示され、残りはケルヴィングローヴ博物館で保管された。これらの品々は、現在でもケルヴィングローヴ博物館に保存され、明治を代表する工芸作家、宮川香山の作品は、日本でも公開されたばかりである⁶。

この物品交換に関連する書簡に目を通すと、1877 年 5 月 3 日にペートンがスミスに宛てた手紙には、東京帝国立博物館の要職にある人々に、一連の交換の提案を橋渡ししてくれるように頼んでいる⁷。また、1877 年 10 月に、ロバート・ヘンリー・スミスが博物館長の町田久成にあてた手紙などから、グラスゴーの美術館の主任学芸員であるジェームズ・ペートンから仲介の依頼を受けていることがわかる⁸。1877 年 6 月 19 日には、スミスは「貴下ニ申呈シタル『グラスゴー』府『ゼームス・ペートン』氏の東京博覧会ト『グラスゴー』府勸業博物館ト互ニ進物ノ交換ヲ行ハントスルノ建言」への返答を町田に求め、日本とグラスゴーの双方にとって満足に行く示談を整えることに尽力することを伝えている⁹。

このように、日英両方の資料をつき合わせた結果、物品交換を申し込んだのはグラスゴー側であることが明らかとなった。1877 年 11 月 22 日付けのスミスから町田にあてた手紙では、このペートンが申し出た物品交換についての正式な許可が内務卿から下りたことを歓迎し、ペートンに代わってお礼を述べている¹⁰。

先に引用した 1877 年 6 月 19 日の書簡には、ペートンから希望の贈答品の目録に変更があったことが書かれているため、グラスゴー側から具体的に日本にどのような品物が欲しいのかを伝えていたことが推測される。この目録には、陶器、磁器、染木綿および形木綿、生糸、漆器、絹、縮綿、青銅、酒、木材など、多種多様な品物が挙げられている。興味深いのは、漆器などの実際の物品を要求するだけでなく、その製作方法も知らせるように希望していることである。日本側が制作した物品目録には、丁寧に酒造品などの製造過程などを書き記しており、日本がこの物品交換に誠実に取り組んでいたことが想像される。一方、日本は鋼鉄製造品の他に、銅硫分析法など、技術的なものを要求している¹¹。最終的に日本に送った物として、1879 年の美術館官報に報告されているのは、(図 1) の通りである。鉄製品のような重工業品だけでなく、ウールやアンゴラ、マッチやマッチ箱など、今日の日本ではありふれてしまった日常品が、グラスゴーからこの時代に送られてきたことがわかる¹²。

既に述べたように、この物品交換にはハリー・パークス卿も関わっていたが、日本の文化に通じていることから、目録の物品に、和紙や革、麻、扇、などを加えるように助言していることが、パークスがスミスに宛てた手紙からわかる。また、パークスは、扇や漆塗りのトレイなど安価であればイングランドでも需要があるとして、見本の品物の一つ一つに値札をつけておくように助言している¹³。これは、ジャポニスムの現象と日本の殖産興業の事情をパークスが意識していたからに違いない。

それでは、なぜこのような物品交換が日本とグラスゴーの間で成立したのだろうか。以下、この物品交換の背景を、岩倉使節団のグラスゴー訪問、工学寮（工部大学校）のお雇い教師の人選、そして 19 世紀後

半に欧米で起こったジャポニスムとの関連から考察したい。

CONTRIBUTIONS TO COLLECTION FOR JAPANESE MUSEUM.

Series of 11 Specimens illustrating the manufacture of Alum, Red and Yellow Prussiate of Potash.

Presented by The Hurler and Campsie Alum Coy.

Bichromate of Potash.

Presented by John and James White, Shawfield, Rutherglen.

12 Specimens illustrating the products of Gas Tar.

Presented by George Miller & Co., 89 Rumford Street, Bridgeton.

22 Specimens of Pottery.

Presented by The Port-Dundas Pottery Co.

23 Specimens illustrating the manufacture of Bar and Pig Iron.

Presented by The Glasgow Iron Co.

Glass Show Case, containing Specimens of Sewing Cotton.

Presented by J. & P. Coats, Paisley.

92 Illustrations of Alkali (Soda) manufacture and Collateral Industries.

Presented by Charles Tennant & Co., St. Rollox.

22 Specimens illustrating Asbestos Manufacture.

Presented by The Patent Asbestos Co. (Limited).

84 Specimens illustrating the processes of Bleaching and Calico Printing.

Presented by Inglis & Wakefield, Busby.

6 Varieties of Scotch Wools.

Presented by J. & W. Greig, Macalpine Street.

150 Specimens of Woollen, Worsted, Angola, and Fancy Yarns.

Presented by David Sandeman & Co., 11 John Street.

367 Illustrations of Linen Thread Making.

Presented by Finlayson, Bousfield, & Co., Johnstone.

3 Illustrations of the Stereotyping of the *Glasgow Herald*.

Presented by the Proprietors of the *Herald*.

88 Specimens of Colours, Varnishes, White Lead, and Sheet Lead.

Presented by Alexander, Fergusson, & Co., Macalpine Street.

41 Specimens illustrating the manufacture of Fire-Clay Bricks.

Presented by James Dunnachie, Glenboig.

150 Specimens of Steel Manufacture.

Presented by The Steel Co. of Scotland (Limited).

31 Illustrations of Sugar Refining.

Presented by W. Connal & Co., 43 Virginia Street.

54 Specimens of Lucifer Match and Match Box Making.

Presented by John Jex Long, Duke Street.

17 Specimens of Artistic Chromo-Lithographs.

Presented by Maclure & Macdonald, St. Vincent Place.

18 Specimens of Tapestry Weaving.

Presented by Barbour & Miller, Brook Street, Mile-End.

2. 岩倉使節団

明治政府は、日本と通商修好条約を締結した諸国を歴訪する大規模な使節団を欧米12ヶ国に派遣した。岩倉具視が全権大使をつとめたこの岩倉使節団一行は、およそ50名からなり、副使として木戸孝充(参議)、大久保利通(大蔵卿)、伊藤博文(工部大輔)、山口尚芳(外務小輔)が随行した。彼らの目的は、条約を改正する交渉を行うことのほかに、明治初期の日本が近代化を進めていくにあたって、西欧社会の産業上の発展を広く見聞することでもあった。

使節団の一行は、1872年10月にグラスゴーやエディンバラ、ハイランドを訪れ、意欲的に工場視察を行った。グラスゴーは、スコットランド中部西岸にあるストラスクライド州の州都であり、クライド川の河口部に位置しており、貿易港であるだけでなく、炭田、水運などの立地条件から、産業革命を経て、工業地域、特に造船の街として発展した。市内を流れるクライド川に沿って港の整備が行われ、スコットランドにおける諸産業の中核都市となり、ヴィクトリア朝(1837-1901)のイギリスにおける第二の都であった。グラスゴーの街の起りこは、6世紀にセント・マンゴが小さな教会を建てたことにあるとされているが、15世紀終わり頃からグラスゴーが交易都市として本格的に発展する。スコットランドでは、中世から義務教育の制度を設け、16世紀に宗教改革が起こってからは、全ての教区に学校を設立し、「国民教育制度」を設けたという¹⁴。もともと経済的には貧しい土地であったが、宗教を背景とした歴史的伝統から教育水準が高く、産業革命期に多数のスコットランド人の科学者を輩出し、イギリス産業革命の担い手となった。16世紀に始まる教育の伝統は、19世紀にこの街を大英帝国の経済を支える工業の街として発展する道へと導いた。例えば、ジェームズ・ワットは、18世紀後半に蒸気エンジンを大改革することで産業革命への道を開いたのである。

16世紀頃からグラスゴー近郊で石炭が掘られていたが、19世紀初頭に鉄鋼山が発見されると、蒸気エンジンの導入に支えられて、製鉄と機械工業が発達した。グラスゴーで造船が始まったのは19世紀の初めであるが、鉄鋼船の建造を始めたこと、燃料を大幅に改善した複合エンジンを開発したことなどで、造船技術において世界をリードしていった。岩倉使節団の一行が、造船の街としてヴィクトリア朝の繁栄を支えた近代工場のあるグラスゴーを訪れたのは、明治政府が日本を近代国家として樹立するために工業技術を学ぶ必要があると判断していたからであることが分かる。

使節団にはハリー・パークス卿も同行し、ブタンタイア卿の賓客として、アースキン・ハウスに滞在し、ここを拠点にしてグラスゴーを訪れた。彼らは、グラスゴーの綿紡工場、造船所、精糖工場、商工会議所を含めた多くの場所を見学している¹⁵。地元の新報『グラスゴー・ヘラルド』によると、紡績や染色の過程を丁寧に視察し、農場では脱穀機に非常に関心を寄せ、トウモロコシの皮のむかれるスピードに興味を示していたという¹⁶。

彼らは商工会議所も訪れ、商工会の理事たちに会い、総裁であるマセソンと面会したという。マセソンはスピーチの中で、開国以来日本がめまぐるしい発展をとげ、1861年にスコットランドから日本への輸出額が43,000ポンドであったのが、10年後の1871年にはスコットランドとイングランドの羊毛や毛織物製品、鉄やその他の製品を含めて300万ポンドまで膨れ上がったことを歓迎し、次のように述べている。

「いつの日か、時が来れば、絹やお茶、その他の日本の生産品を、私たちの製品との交換物としてお贈りくだされば、大変に喜ばしいことであると私がここで申し上げることを、お許しいただきたい。」¹⁷

筆者は、上記に引用したマセソンのスピーチが、1878年の物品交換につながったと考える。

3. グラスゴーからのお雇い教師

ヴィクトリア朝のイギリスにおける第二の都市、工業の街として繁栄していたグラスゴーと殖産興業を

目指していた日本との交流は、技術が芸術に先行した。1853年のペリー来航からおおよそ13年後、伊藤博文、井上馨、井上勝、山尾庸三、遠藤謹介の長州藩の若者5人組がイギリスへ密航した。この5人のうち、造幣局に出た遠藤以外の4人は工部省の要職を勤め、日本の近代化に大きな役割を果たすが、中でもグラスゴーと日本との関わりに重要だったのは、山尾庸三と伊藤博文であった。山尾は、1866年に初めてグラスゴーにおける日本人留学生となり、1868年までアンダーソニアン・カレッジ（現在のストラスクライド大学）で理論を、ロバート・ネピアの造船所で働きながら実践を学んだ。帰国後は工部省で重要なポジションを与えられ、工学教育の推進に努め、日本の近代化のために重要な役割を果たした。工部大輔となった伊藤は、岩倉使節団の副使として渡英した際には、工学寮（後の工部大学校）の都検及び教師の人選を任されていた。

近代技術の移植導入による産業育成に力を入れるため、明治政府は工部省を設け、この工部省内に技術者を養成する機関として、工学寮を設立した。工学寮は、1870年（明治3）に設置された工部省の工業教育機関として1873年（明治6）に設立され、1877年（明治10）には改組されて工部大学校となる。前述のように、工学寮設置の際にお雇い外国人教師の雇用の権限を持っていたのは、長州5人組の一人として渡英し、後に岩倉使節団の副使としてグラスゴーを訪れた工部大輔の伊藤博文であった。三好信浩は、工部大学校教師の人選では、伊藤博文がかつてイギリス留学したときに庇護をうけたジャーディン・マセソン商会のH.M.マセソンと、マセソンが協議したグラスゴー大学の土木工学のL.D.B.ゴードンおよびグラスゴー大学の工学教授であったウィリアム・ジョン・マッコーン・ランキンに人選を託したことを指摘している¹⁸。このような経緯から、工学寮の教師や技術者の多くはグラスゴーから招かれた。工部大学校のお雇い教師のうち、グラスゴー大学出身は、ヘンリー・ダイアー（土木・機械工学教授）、ウィリアム・グレイ・ディクソン（英語・英文学教授）、トマス・グレイ（電信学インストラクター）、トマス・アレキサンダー（機械工学助教授）、アーサー・ワトソン・トムソン（土木機械・測量学インストラクター）等がいた¹⁹。この中で、都検として1873年に来日したのは、山尾庸三とアンダーソニアン・カレッジで同級であったグラスゴー出身のヘンリー・ダイアーであり、以後1882年まで、工学者、技術者として、工部大学校で学生の教育に携わった。ダイアーはヨーロッパ大陸諸国の工科大学をモデルに、イギリスの経験主義的実地教育を取り入れた工学教育を実践した。

このように、日本は山尾庸三の留学や岩倉使節団を通して得た人脈から、日本の近代化を進めていく上で重要な役割を話した工学寮の人選を行い、技術から教育システムに至るまで、多くをグラスゴーから学んだのである。

4. グラスゴーにおけるジャポニズムと1878 - 79年の物品交換の意義

明治日本が西洋の技術を学ぼうとする一方で、開国後流出した浮世絵などの日本の品々は、西洋の芸術家を魅了し、19世紀後半の欧米ではジャポニズム（日本趣味）が流行した。ロンドンやパリなどで1860年代からジャポニズムの流行が盛んになっていたが、グラスゴーにおけるジャポニズムの作品は、1870年代以降から見られるようになる。例えば、グラスゴー近郊で現存している作品として最も早い例と思われるものとして、建築家ウィリアム・リーパーによるケアンドゥ（1872年）が挙げられる。ケアンドゥは、グラスゴー郊外のヘレンズバラにあり、個人の邸宅として建てられ、室内装飾から家具に至るまでリーパーがデザインを手がけた。ロンドンでW.バージェスやE.W.ゴドウィンのサークルにいたリーパーは、その一室にアングロ・ジャパニーズ・スタイルのインテリアをデザインした。現在では老人ホームとして使用されているが、今でもインテリアは当時のままであり、リビングとして使用されている部屋の天井は、アングロ・ジャパニーズ・スタイルの家具を思わせる、黒檀風に黒く塗られた角材を格子状に組み合わせた

格天井で、パネルには金を背景に草花が描かれている。正にジャポニスムに唯美主義的な嗜好が加わったインテリアである。唯美主義と日本趣味の融合がイギリスにおけるジャポニスムの特徴であるが、1870年代初期にデザインされたインテリアに、ロンドンで流行していたアングロ・ジャパニーズ・スタイルが用いられているものはスコットランドにおいては稀であり、リーパーがロンドンで唯美主義運動をリードした建築家・デザイナーの一人であるE. W. ゴドウィンたちとの交流から、ジャポニスムへの興味が芽生えてきたことが分かる。しかし、ケアンドゥはあくまでも有産階級の個人の邸宅であり、スコットランドにおける日本の流行に広く影響を与えたとは言い難い。

スコットランドで一般市民の間で日本の流行が見られるようになるのは、1878年の物品交換以降である。その後、日本をテーマとした展覧会や、日本の品物を扱う店が増えるのである。1881年12月から翌年4月にかけて、日本、ペルシャものを中心とした東洋美術展 (Oriental Art Exhibition) がコーポレーション・ギャラリーズで開催された²⁰。市の博物館のレポートによると、およそ3万人がこの展覧会を訪れ、大盛況であった。同レポートでは、多くのデザイナーや美術学生が訪れ、学ぶという目的で展示物を鑑賞したことは、この美術展の目的がある程度達成されたと言ってよいだろうと評価し、翌年にはイタリア美術の展覧会を開催することが決定されたことが記されている²¹。この美術展の開催中、1882年3月20日には、1876-7年に日本を訪れたグラスゴー出身のデザイナー、クリストファー・ドレッサーが日本についての講演を会場で行った。ドレッサーは、『日本、その建築、美術および工芸』という本をこの年に出版している。

日本の品物を取り扱う店もグラスゴーにはいくつかあり、セント・ヴィンセント通りにあるシティ・オリエンタル・ウェアハウス (The City Oriental Warehouse) は1888年に地元の『クイズ』誌に「伊万里、加賀、七宝と京焼」という広告をだしているし、クイーン・ストリートの159番地に店を構えていたクレイブ・アンガスが「骨董品—古いペルシャ、中国、日本、そしてオランダの焼き物」という広告を同年のグラスゴー博覧会のカタログにだしている²²。

1889年には、美術商のアレキサンダー・リードが、ウエスト・ジョージ・ストリートにあった彼の店で浮世絵の展覧会を開いた。同年、グラスゴー美術倶楽部で仮装パーティーが開かれると、画家のE.A.ウォルトンが北斎に、そして彼の婚約者は蝶に扮した。蝶は、グラスゴー・ボーイズのヒーローであったアメリカ人の画家、J.McN.ホイスラーが頭文字、MとNを組み合わせてデザインしたモノグラムサインであり、日本の紋意匠から想を得たものである。ホイスラーの日本趣味は広く知られており、蝶への扮装はホイスラーへの賛美を表すものであった。ホイスラーはグラスゴー・ボーイズと呼ばれる若い画家のグループに大変な人気があり、J. ラヴェリーが自伝の中で『10時の講演』は芸術の福音であった」と述べているように、グラスゴー・ボーイズのメンバーは、ホイスラーの芸術についての思想と、芸術家としての姿勢を賞賛していた²³。『10時の講演』はホイスラーが1885年にロンドンで行った講演で、ホイスラーの唯美主義者としての立場を明らかにしたものであり、芸術の自然からの独立とその優越性を説いたもので、画家は「美の物語はパルテノンの大理石が刻まれ、北斎が扇の富士山の麓に鳥の刺繍をした時にすでに完成している」と述べて、日本の浮世絵師、北斎の名でこの講演を締めくくっている²⁴。1888年にグラスゴーで展示されたホイスラーの代表作の一つである、スコットランド出身の哲学者、トーマス・カーライルの肖像画《灰色と黒のアレンジメント：トーマス・カーライルの肖像》が後にグラスゴー市の買い上げとなるが、これは、グラスゴー・ボーイズのメンバーによる働きかけによるところが大きかった²⁵。

1893-4年にはグラスゴー・ボーイズのメンバーとして知られるG.ヘンリーとE.A.ホーネルがアレキサンダー・リードとウィリアム・バレルの経済援助を得て日本を訪問する。E.A.ホーネルは、「ヨーロッパにおける最も素晴らしい芸術に匹敵する日本美術の影響は、幸いにもヨーロッパの新しい流れに影響を与え

ているように感じられ、この素晴らしい芸術が芽生えた環境を見て学び、人々とじかに接して彼らと共に生活し、彼らの知識の源を発見したいという願いを芸術家の中に生み出した」と述べて、日本美術のみならず、日本の風土や文化を直接体験するために1893・4年に来日した²⁶。二人は日本を訪れた外国人のお土産用、または輸出用に大量生産された横浜写真を利用して、日本を題材とした作品を描き、帰国後にホーネルがリードのギャラリーで行った美術展は大成功に終わった。

そして、19世紀末には、建築家・デザイナーとして知られるチャールズ・レニー・マッキントッシュが、日本からインスピレーションを得て多くの作品を制作し、その影響はヨーロッパ大陸にまで及んだのである。前述のリーパーの作品に表れた日本美術への興味は、日本美術や建築の本質を取り入れることではなく、インテリアを奇抜な方法で装飾するというところにあった。しかし一方で、マッキントッシュの日本への眼差しは、デザインに関する彼の考えとコンセプトにかかわっている。つまり、目新しい異国のものという段階を脱し、日本建築の空間や簡素な表現に、近代性を見出したのである。

おわりに

以上述べてきたように、グラスゴーと日本の間で行われた物品交換の背景には、日本の近代化と欧米におけるジャポニズムがあった。エディンバラ大学の出身のロバート・ヘンリー・スミスの仲介もあり、日本政府がグラスゴーの求めに応じて1000を超える品物を送り、グラスゴーとの間に物品交換が成立したのは、とりもなおさず、山尾庸三の留学や岩倉使節団、工部大学校のお雇い教師を通してグラスゴーと日本との間に信頼関係が築かれていたことが大きな理由の一つであったと思われる。また、グラスゴーにおけるジャポニズムについて考察する場合、1878年以降にその気運が高まったことから、欧米におけるジャポニズムの流行を把握していたジェームズ・ペートンの役割が大きかったと言えるだろう。

グラスゴー市の博物館にはオリジナルの資料はほとんど保存されておらず、これまでの研究では、物品交換の経緯については想像の枠を越えなかった。唯一の資料として、グラスゴー市の博物館レポートが引用されてきたが、これが必ずしも歴史的な事実に基づく客観的な資料とはいえないことが明らかとなった。ジャポニズムは日本の品物や美術品が欧米の芸術家の灵感源となったとはいえ、あくまでも欧米で起こった文化現象であるため、これまで欧米の資料を中心に研究されてきた。しかし、東京国立博物館に所蔵されている書簡から物品交換の経緯がある程度明らかとなったことを考えると、これまでの研究方法を改め、広い視野から資料の収集を行う必要がある。

今後の課題として、グラスゴーの学芸員ジェームズ・ペートンと仲介者スミスとの関係や依頼の経緯についてさらに詳しい調査を進めたい。また、スミスは、日本の学生を教育するために、未使用、使用済み、両方の工業製品が必要であったことを後年述べているため、日本の技術教育への影響が考えられる²⁷。今後、既存の資料の更なる分析と、新出資料を求めて研究を進め、物品交換が日本の技術教育に与えた影響や、産業振興、工芸教育等にもたらした影響についての調査を課題としたい。

註

- ¹ 東京国立博物館に所蔵されているオリジナルの資料で「物品交換」とされているので、本稿でも「物品」という語を使用する。
- ² *Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow, for the year 1878*, p.6
- ³ 前掲、註2、p.6
- ⁴ 東京国立博物館、列品録、1234—122M12, 1234—123M12, 1234—138M12, 1234—139M12, 本稿で引用する列品録については伊藤嘉章氏が御教示下さった。
- ⁵ 前掲、註2、p.6 及び *Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow, for the year 1879*, p.4.
- ⁶ 『宮川香山展』2001年10月28日から12月24日まで横浜美術館で開催。
- ⁷ My committee will therefore be under further obligation to you if you will kindly undertake to submit to the authorities of the New Industrial Museum at Tokio a proposal for instituting a series of exchange. 列品録、1234—135M12.
- ⁸ 列品録、1234—122M12, 1234—123M12, 1234—124M12.
- ⁹ 列品録、1234—127M12.
- ¹⁰ '...to express my pleasure at hearing that you have received authority from the Naimukio to effect the exchange which Mr. Paton has proposed between your Tokio Museum and this Museum in Glasgow. I shall send a translation of your letter to Mr. Paton for next mail and on his behalf, I beg to thank you and Naimukio.' 列品録、1234—146M12.
- ¹¹ 列品録、1234—131M12, 1234—132M12.
- ¹² *Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow, for the year 1879*, p.16
- ¹³ 列品録、1234—176M12, 1234—177M12.
- ¹⁴ 北政巳、『国際日本を拓いた人々 — 日本とスコットランドの絆』、同文館、昭和59年、p.46
- ¹⁵ 久米邦武編、『特命全權大使米欧回覧実記』、田中彰校注、第2巻、1997年、岩波文庫、pp.188-206.
- ¹⁶ *The Glasgow Herald*, 11 & 12 October 1872
- ¹⁷ *The Glasgow Herald*, 11 October 1872
- ¹⁸ 三好信浩、「工部大学校の教育」、『広島大学教育学部紀要』、第24号、1975年、第1部、p.78
- ¹⁹ 前掲書、註14、pp.104-105
- ²⁰ 展示物のほとんどは、サウスケンジントン美術館（現在のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）やエルギン卿ヤリパティール夫妻などの、個人の収集家から借りたものであった。*Oriental Art Exhibition. Comprising Principally the Decorative Arts of Japan and Persia*, Corporation Galleries, Glasgow, December, 1881 till May 1882, Robert Anderson, 22 Ann Street, Glasgow, 1881.
- ²¹ *Report on the City Industrial Museum, Kelvingrove Park, and the Corporation Galleries of Art, Glasgow, for the year 1882*, p.7.
- ²² *International Exhibition*, Glasgow, 1888, p.i.
- ²³ John Lavery, *The Life of a Painter*, London, 1940, p.108. Also see Bill Smith, *Hornel. The Life & Work of Edward Atkison Hornel*, Edinburgh, 1997, p.87.
- ²⁴ James McNeill Whistler, 'Ten O'Clock Lecture', delivered in London, 20 February 1885. Printed in James McNeill Whistler, *The Gentle Art of Making Enemies*, London, 1890, pp.134-59.ホイスラーのジャポニスム及び『10時の講演』の解釈については小野文子「ジェームズ・マックニール・ホイスラーと日本」『美術史』、第156冊、Vol.53 No.2、365-79頁参照。
- ²⁵ William Buchanan, 'Mr. Henry and Mr. Hornel visit Japan', *Mr. Henry and Mr. Hornel visit Japan*, exh.cat., The Scottish Arts Council, 1978-9, pp.7-8.
- ²⁶ E.A. Hornel, *Japan*, delivered in the Corporation Art Galleries, Glasgow, 9 February 1895. See Ayako Ono, *Japonisme in Britain. Whistler, Menpes, Henry, Hornel and nineteenth century Japan*, London 2003, Appendix H.
- ²⁷ *The Engineer*, 1910, vo.109, 397. Quoted in Antonia Lovelance, *Art for Industry. The Glasgow Japan Exchange of 1878*, Glasgow Museums, 1991, p.12.

(2004年11月24日 受理)